

清朝とイスラーム —17～20世紀の中国ムスリム・ネットワークの 動態と国家との多元的關係—

海野典子

東京大学大学院総合文化研究科 博士課程
ハーバード・イェンチン研究所 客員研究員

研究の背景

冷戦終結後も世界各地で民族紛争が繰り返されるとともに、民族主義を叫ぶ声が一層高まりつつある今日、多民族国家や多文化主義のあり方、「民族」「宗教」概念そのものの意義を問い直す議論がいたるところで行われている。筆者は、過去に存在した代表的な多民族帝国の一つとして知られる清朝に着目し、その統治下におけるムスリムと国家の関係を研究することによって、「民族」や「宗教」に関する議論の進展を促すことを企図している。

1636年に満洲人が建国した清朝の支配領域には、時期によって多少の違いはあるものの、数十万程度のムスリム人口が暮らしていたとされる。これらのムスリムは、大きく二つの集団に分けられる。まず、7世紀中葉以降に来華した西アジアや中央アジア出身のムスリムと中国土着の人々の通婚によって、歴史的に形成された回民という集団である（現在の中華人民共和国における回族にはほぼ相当）。次に、18世紀までに清朝の新たな征服地（新疆）となった中央アジアのトルキスタン東部に居住する、テュルク（トルコ）系ムスリムである（現代ウイグル人にはほぼ相当）。

清代ムスリム史に関する従来の歴史叙述では、清朝の圧政に抵抗するムスリム民衆という見方が主流であり、19世紀後半に雲南や西北地域で発生したムスリム反乱やイスラーム神秘主義教団に対する清朝の弾圧、虐殺が殊更に大きく取り上げられてきた（代表的研究として、Atwill 2005；Kim 2004）^{1,2)}。だが、近年では、弾圧と抵抗という単純な二項対立の図式では説明しきれない、清朝とムスリムの複雑な間柄に注目が集まっている。たとえば、清代に活躍した回民知識人の思想史や清朝の中央アジア政策の変遷を論じた最新の研究成果（中西 2013；小沼 2014）^{3,4)}によって、清朝とムスリム、非ム

スリムとムスリムの多元的關係が明らかになりつつある。

研究方法

多民族帝国・清朝の実態解明やムスリムの国家観の理解を目指す先行研究が主な史料とするのは、回民知識人の著作や清朝の档案資料（公文書）である。一方、ムスリムの間で長く語り継がれてきた民間伝承や「花兒」と呼ばれる民謡は、史実を伝えるものではないとして、実証史学的研究においてはほとんど利用されてこなかった。しかし、ムスリムの民間伝承には、康熙帝や乾隆帝の対イスラーム政策を高く評価し、その徳を称えるものが少なくない。また、そこには当時のムスリムと清朝の關係や、彼らの国家に対する切実な願望が反映されていると考えられる。そこで、本研究は、清代に成立した『回回原来』*Huihui Yuanlai*、『西來宗譜』*Xilai Zongpu*といったムスリムの民間伝承の形成過程や歴史的意義、そこに描かれた清朝皇帝像を、中国・中央アジア各地の档案資料や清真寺（モスク）に保存されている碑文「聖旨勅諭記」の記述と照合しながら明らかにした。

また、本研究では、回民あるいは新疆ムスリムのいずれかのみを対象としてきた従来の研究とは異なり、地域、エスニシティ、宗派、階層を超えたムスリムの広範なネットワークの動態に着目した。実際に、清朝皇帝を賛美する内容の民間伝承や碑文は、17世紀末から20世紀初頭の時期に全国各地のムスリム社会で見られた。その背景には、聖地巡礼や知識伝達、交易などを目的とする移動に伴う、ムスリム間の活発な情報交換があったと推察される。清朝領域内で刊行されたこれらの漢語・チャガタイ語文献のみならず、清末中国を訪れたロシアのムスリムや欧米のキリスト教宣教師の記録も利用することによって、民間伝承に見られるムスリムの清朝皇帝

像やそれを支えたネットワークを多角的に検討することを試みた。

結果・考察

17世紀後半から20世紀初頭の清朝とムスリムの多元的關係、ムスリムの動的ネットワークを明らかにするために、本研究は、『回回原来』をはじめとするムスリムの民間伝承や清朝の档案資料に見られる、清朝の対イスラーム認識、およびムスリムの国家観や世界観を考察した。その結果、以下の2点が明らかになった。

第一に、20世紀初頭まで、回民知識人の多くは民間伝承を「歴史書」と認識していた。『回回原来』は、清代初期に南京出身の著名なイスラーム学者である劉智の父親・劉三傑が編纂したと言われている。『回族典藏全書』（甘肅文化出版社、2008年、全235巻）の採録分をはじめ複数の版本が存在するが、大まかな内容は以下の通りである。妖怪が宮殿に入るのを夢に見た唐の皇帝が「天方国」から招聘した「西域纏頭」は、妖怪を退治して唐王にイスラームの教義を紹介する。唐王はイスラームを称賛し、この人物に欽天監の職を与えた。時代は下り清代、名君・康熙帝は国内のムスリムに恩情を示し、この書物を回民の家臣に授けたという。

無論、これらのエピソードは史実ではない。だが、清代後期から中華民国初期にかけて、『回回原来』や類似の伝承が相次いで刊行され、回民知識人の一部はそれらを「歴史書」と呼び、時に自身が執筆する「歴史書」にも引用していたことがわかった。また、当時中国に滞在していた欧米のキリスト教宣教師やロシア・ムスリムもまた、民間伝承が「歴史書」として信頼されていたことを伝えている（Broomhall, Marshall. 1910. *Islam in China*; İbrahim, Abdürreşid. 1910. *Âlem-i İslâm ve Japonya'da İntişâr-i İslâmiyet.*). なお、康熙帝に関する上記のエピソードは、1690年代に中央アジアの遊牧帝国であるジュンガル部のガルダン・ハーンが北京に派遣したムスリムの密偵を匿ったとして、回民が弾圧の対象となりかけた際、康熙帝が回民を保護したという逸話が題材となっていることがわかった。このエピソードに関しては、各地のモスクの石碑にも同様の記述が確認されることから、清代ムスリム社会においては影響力のある言説だったのではないかと考えられる。

第二に、「非ムスリムではあるが、イスラームの良き理解者である」という清朝皇帝像は、全国的なムスリムのネットワークを背景として中央アジアにまで伝播し、

変容を遂げた。20世紀初頭、新疆やロシア領中央アジアで書かれたテュルク語の歴史書（Sayrami, Mulla Musa. 1905. *Tārīkh-i Amniyya*; *Tarīkh-i Hamidi*. 1908）は、回民の民間伝承を引用しながら、歴代中国皇帝はイスラームを信仰していたと主張した。中国皇帝をムスリムの末裔と見るユニークな歴史観は、清朝への服従を是としたとされるテュルク系ムスリムの国家観（濱田1993）⁵⁾と関連させて、より詳しく検討されるべきだろう。

清朝皇帝とチベット、モンゴルの関係は、チベット仏教教団と施主の関係と説明され、皇帝は文殊菩薩の化身に喩えられる（中見2000）⁶⁾。一方、17～20世紀のムスリムたちは、「イスラームの良き理解者」（回民の場合）、「ムスリムの末裔」（テュルク系ムスリムの場合）という中国皇帝像を描き、それを広めることによって、非ムスリムが統治する「戦争の家」*dar al-harb*に居住する自己を正当化したのだろう。そして、それは同時に、非ムスリム支配者の下でムスリムとして生きるという、彼らの決意や願望を反映していたのだと考えられるのである。

今後の展望

本研究は、17～20世紀のムスリムの中国皇帝像の形成過程を中心に、イスラームと清朝の多元的關係を明らかにしようとした。清朝はロシア帝国のような宗教管理の制度を持たず、18世紀半ばまで漢人と回民を政策上ほとんど区別していなかった。1781年と84年に甘肅でジャフフリーヤ（スーフィー教団、すなわちイスラーム神秘主義教団の一つ）の反乱が起きると警戒心を急激に強め、新疆のムスリムに対しても厳しい態度をとるようになった（華2006）⁷⁾。そのため、清朝の対イスラーム政策を、清朝との交流が盛んであったチベット、モンゴルの事例と単純に比較することはできない。また、清朝皇帝自身が「イスラームの良き理解者」として積極的に振る舞ったか否かについては、さらなる検討の余地がある。

さらに、本研究が主な分析の対象とした一次史料が、男性の回民識字層によって書かれ、後世に伝えられたものであることに留意せねばならない。特に『回回原来』などの民間伝承は、清朝の官吏によって漢人のムスリム集団と見なされてきた回民が、漢人とは区別される独特な自己認識、すなわち「西域」出身者の末裔としての意識を形成するうえで大きな役割を果たしたと考えられ

る。だが、血統や出身階層を自己認識の大きな拠り所とするとされる回民男性とは異なり、回民女性は個人のイスラーム信仰を自己認識の根幹とする、という指摘がある (Jaschok & Shui 2000)⁸⁾。今後は、回民女性の視点をできる限り取り入れながら、民間伝承の意義や政治権力との関係を多角的に考察する必要がある。

謝 辞

本研究は、平成27年度三島海雲記念財団研究助成金 (個人研究奨励金) 助成金交付により遂行することができました。この場をかりて心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) D. G. Atwill: *The Chinese Sultanate: Islam, Ethnicity, and the Panthay Rebellion in Southwest China, 1856–1873*, Stanford, Stanford University Press, 2005.
- 2) H.-d. Kim: *Holy War in China: The Muslim Rebellion and State in Chinese Central Asia, 1864–1877*, Stanford, Stanford University Press, 2004.
- 3) 中西竜也: 中華と対話するイスラーム—17–19世紀中国ムスリムの思想的営為, 京都大学学術出版会, 2013.
- 4) 小沼孝博: 清と中央アジア草原—遊牧民の世界から帝国の辺境へ, 東京大学出版会, 2014.
- 5) 濱田正美: 『塩の義務』と『聖戦』との間で, *東洋史研究*, 52 (2), 1993.
- 6) 中見立夫: 中央ユーラシア史 (中央ユーラシアの周縁化, 小松久男編), 山川出版社, 2000.
- 7) 華立: 乾隆朝の新教回民弾圧と新疆への波及, *東アジア研究* (大阪経済法科大学) 45, 2006.
- 8) M. Jaschok, J. Shui: *The History of Women's Mosques in Chinese Islam*, Routledge, 2000.